



営農NEWS



水稻とダイズの夏季高温・少雨による影響と対策

猛烈に暑い日が続いています。気象庁の「7月21日から8月20日までの天候見通し」によると、関東甲信地方の向こう1か月間の平均気温は、高い確率70%、日照時間は、平年並みまたは多い確率ともに40%です。また、降水量は少ない確率40%となっています。引き続き、高温と少雨による収量と品質への被害軽減対策を徹底してください。

1 水稻

出穂期からその後20日間くらいに、平均気温が29℃以上、最高気温34℃以上、最低気温24℃以上のいずれかの日が5日間以上続くと、乳白粒や背白粒、胴割粒など、高温による障害粒の多発の恐れがあり、検査等級の低下が懸念されます。

- (1) 登熟初期～中期（出穂後20日頃まで）の高温により、乳白粒が増加します。
- (2) 登熟期中期～後期（出穂20～30日頃）の高温により、背白粒が増加します。主に「あきたこまち」にその発生が懸念されます。
- (3) 登熟初期（出穂後10日間位）及び収穫期前後の高温乾燥により、胴割粒が増加します。また、登熟初期が高温で経過し、その後収穫時期が遅れると胴割粒が顕著に増加します。
- (4) 夜温が高いと水稻の消耗が大きいため、玄米千粒重の低下（特に粒厚の減少）が懸念されます。
- (5) カメムシ類による斑点米の発生が懸念されます。

対策

- (1) 根の活力低下を防止し登熟を促進するため、出穂期後30日間は落水を避け、間断かんがいを徹底します。しかしこの時期は、玄米の成熟にとって水が大変必要な時期ですので、田面が乾かないように十分注意します。入水のタイミングは、砂質のほ場は田面に触れると湿り気を感じる程度、粘質のほ場は田面に触れると水が付着する程度の時です。
- (2) 収穫作業の計画を立て、適期収穫に努めます。
- (3) 圃場をよく観察し、出穂期～穂揃期に多数の斑点米カメムシ類を認めた場合は、防除を実施します（営農ニュースNo. 2637号 7月23日発行を参照）。

2 大豆

大豆は生育に、多くの水を必要とする作物です。特に、開花期から子実（豆）肥大初期の水分不足は、収量に影響します。

- (1) 大豆は高温よりも干ばつによる被害の発生が懸念されます。晴天が1週間程度続いた場合、土が白く乾燥し、日中に大豆の葉が立ち、半分以上の葉で裏面が見えたら干ばつ被害を受けやすくなります。
 - ① 8月上旬の開花期以降における乾燥は、花数を減少させ、落花や落莢の増加により結莢数が著しく減少し、収量低下につながります。
 - ② 9月上旬の子実肥大前期の乾燥は落莢と不稔莢を増加させ、収量低下につながります。
 - ③ 以上のように子実が少なくなると、収穫時期になっても茎が枯れ上がらない青立ちが発生し、汚粒の原因となります。
- (2) カメムシ類、チョウ目害虫の多発生が懸念されます。

対策

- (1) 畝間灌水：畦畔際に沿って掘られた周囲（額縁）明渠と圃場内の排水溝を通して朝夕の涼しい時間帯にかん水します。水が停滞すると湿害を生じるので、水が行きわたったら速やかにかん水を止め、必要に応じて排水します。
- (2) 暗渠が施工されている圃場では、水甲を閉じ、地下水位の低下を防ぎます。
- (3) 圃場を観察し、若齢幼虫のうちに防除を行います。

【主に茨城県農業総合センターと農研機構の情報を参考に作成しました】

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040